

乳児保育再考VI

— 3歳未満児の保育室の在り方を考えるために—

阿部和子 (聖徳大学短期大学部)

I. はじめに

本研究は、保育所に対する社会のニーズが拡大してきていることを視野に入れて、乳児保育がこれまでに実践し蓄積してきたことがらの再検討をし、これからの保育所(乳児保育)の役割を考えることを目的としている。

一日の大半を過ごす場所である保育室について、前々回は0歳児、前回は1, 2歳児のそれぞれの保育室に対する保育者の考えと実際の保育室について検討した。今回は、それらのまとめとして「3歳未満児の保育室」の在りようについて、「住まい(住まう)」という視点から検討を加えることとする。

II. 方法

方法は「保育室」についてのアンケート調査である。

対象は、K市公立保育園全園21園の0, 1, 2歳児担当の保育者であり、内訳は表1の通りである。調査期間は2001年9月から10月上旬である。

表1. 調査対象

室	依頼数	回答数	回収率
0歳	22	18	82%
1歳	25	22	88%
2歳	25	22	88%
合計	72	62	86%

* 1園に複数同一年齢クラスがある園、0歳児保育を実施していない園もある。

III. 結果の考察

1. 保育室の現状

0~2歳までの保育室についての保育者の考えは「家庭的雰囲気—安心・やすらぎ・ゆったり」に代表され、その考えを実現すると考えられる「保育室の環境構成のポイント」としては、概していうと仕切られた空間と小人数を上げている(2002, 2003)。

(1) 仕切られた空間について

保育室空間を、実際にどのように仕切っているのかについてみてみると、大きくは保育室のどこかを仕切っているものと、仕切りのない保育室の2つのタイプに分けられた。その内訳は表2の通りである。

保育室の在りようについては「家庭的雰囲気—安心・やすらぎ・ゆったり」をあげ、その保育室の環境構成のポイントとして「区切る」ということをあげているが、実際にどこかを仕切っている(タイプ2)保育室は、全体で43%である。0歳児室で約6割、2歳児室で約3割と年齢が高くなるにつれて「仕切らなくなる」傾向に

ある。

表2. 現状の保育室のタイプ 単位: 保育室数 () は%

	タイプ1	タイプ2	合計
0歳児	7 (41)	10 (59)	17 (100)
1歳児	12 (55)	10 (45)	22 (100)
2歳児	16 (73)	6 (27)	22 (100)
合計	35 (57)	26 (43)	61 (100)

* 0歳児の保育室において、理想の保育室が書かれていなかったのので、1保育室の結果を削除したので保育室合計が17となる。

(2) 小人数について

K市公立保育園における、0歳児室の保育者と子どもの定数は、おおよそ7割が4対12である。また1歳児室のそれは、5割が3対16、3割強が2対12であり、2歳児室の定数は、約7割が3対18となっている。どの保育室においても、現状の定数で良いとする保育者は少数で、大方の保育者は今より少し緩和された定数を希望している。集団の大きさでは、おおよそ0歳児が10人以下、1歳児では8~12人、2歳児では10人~18人で、18人の集団を希望しているのは少数でありタイプ2の保育室を構成している保育者である。

(3) 現状についての考察

(1)と(2)から、現状において保育者が望む「家庭的雰囲気」のある保育室を作り出すために、現状の子ども集団は大きすぎるので、それへの対応として空間を「仕切る」(タイプ2)ことで小さな集団を構成することを考えている。しかし、現実の保育室はタイプ2の保育室が5割弱である。

2. 理想とする保育室

今回は、保育室の調査における「理想とする保育室」の図示を整理し、さらに保育室の在りようを検討する。

(1) 仕切るという視点からの分析

理想とする保育室の図示を、現実の保育室と同じように空間構成(仕切る)に着目して分類したものが表3である。

表3から、理想とする保育室においては、空間を小さくするという「仕切られた」空間構成の保育室(タイプ2)が約9割と圧倒的に多くなる。年齢別にみると、2歳児の保育室において、9割強とタイプ2が望ましいとしている。しかし、現実の保育室においてタイプ2の仕切られた保育室は3割弱であり、2歳児において現実と

理想とする保育室の在りようの差が最も多いことが理解できる。

表3. 理想とする保育室のタイプ

	タイプ1	タイプ2	合計
0歳児	2 (12)	15 (88)	17 (100)
1歳児	3 (14)	19 (86)	22 (100)
2歳児	2 (9)	20 (91)	22 (100)
合計	7 (11)	54 (89)	61 (100)

* 0歳児室合計17について：無記入1

* 単位は保育室数 0 内は%

(2) 住む(住まう)という視点

保育室は、子どもの生活する場所である。生活するということを、1日のある時間をそこで過ごすということが毎日繰り返されるというように、1日の通過点として捉えるとき、つまり、子どもが生活し育つのは「家庭」であり、保育所(室)は家庭養育の補完をする場所と捉えれば、子どもの生活する場所に、主(家庭)従(保育所)関係が生じる。一方、1日のある時間をそこに「留まる」、つまり、子どもの生活が1日のある時間を「家庭」で、そしてある時間を「保育所(室)」で生活するという住まい方と捉えることも可能である。

「住まう」という視点で、保育所(室)の生活を考えると、生活全般を支える基底となる層である「寝る・食べる」という活動が、生活(保育内容)の重要な部分になる。住みか(住まうところ)を住みかたらしめているものは、濃密な人間関係(情緒的に特別な結びつきを持った人々)と、他から区別された特別な空間でのくつろぎ・安らぎである。この特別な関係と空間の中で、子どもは、概していうと世話をしてもらって生活を通してくつろぎ・安らぐと考えられる。

子どもは、発達のその最初において、他から区別された特別の場所において、世話されることを通して特別な関係を作り上げるやりとりのなかで安らぎ・安心する。

以上のように考えると、保育者が「家的雰囲気」を重視するということは、生活の基底となる部分に重きを置いた保育を重視していると考えられる。保育者がいう「家庭的雰囲気」というのは、現実の家庭をモデルとしているのではなく、安心してそこに住むという「住まい方・居方」の問題として捉えていると考えられる。

(3) 保育者の理想とする保育室

ここでは、「住まい方」を「仕切る」と言うことを通して検討する。子どもの生活(保育内容)を「食べる・寝る・遊ぶ」というように大きく捉えたときに、保育者がどの活動を重視しているのかということが保育室の仕切られ方に表れていると考えられる。

①0歳児は「寝る」空間の確保が5割強の保育室でなされ、「食べる」については6割の保育室で、「遊び」については4割の保育室で空間を確保していることから、一人ひとりの子どもの欲求に対応すること、そこでのやりとりを通してその空間の意味を獲得すること、そしてその空間の雰囲気(例えば食事をする場所の)が子どもを育てることが可能な保育を理想としていると考えることができる。②1、2歳児では、7割弱が「食べる」空間を他と区別したいと考えている。そして、十分に遊べる空間を他から区別したいとすることも1歳児では0歳児より多く6割強であるが2歳児では0歳児と同じく4割となっている。生活の基底となる部分の「寝る」ことに重きを置いた空間構成は「一人」で安心していられるという見守られているという経験を大切にしたい生活ということが出来る。そして、1、2歳児の「食べる」空間に重きを置いた空間構成は、「他と一緒に」という共同することを大切にしたい生活ということが出来る。もちろん、発達的に1、2歳児の「やりたい(自立への欲求)」が子どもの周囲のことがらに向かい、この時期の発達課題が基本的生活習慣の獲得にあるということもある。「食べる」ということは人に向かい、その行為が共有されることで、つまり能動的な行動の中で獲得されていくことを考えると、一緒にいて受け止めてもらうという経験を重視した生活ということが出来る。保育室の条件は「一人でいること」、そして「他と共にいること」の両方が経験されることが必要であると考えていて、ウエイトの置かれ方は年齢により異なると考えていると言える。

IV. 今後の課題

住む・住まうという視点で保育室環境を捉えようとする時、「そこに留まる(そこでの時間の流れ)」ということを考えた時の保育室の在りよう、子どもにとっての安心できる空間の大きさなどの検討、さらに2歳児の保育室における現実と理想のズレの原因究明が課題となる。

	食・遊・睡	主に食事を	主に睡眠を	主に遊びを	その他	合計
0歳児	4	5	4	2	0	15
1歳児	5	8	0	5	1	19
2歳児	4	9	0	4	3	20
	13 (24)	22 (41)	4 (7)	11 (20)	4 (7)	54 (100)

表4. 理想の保育室タイプ2の仕切られ方

単位は保育室数 0 は%